

Title	死の社会学的研究に向けて
Author	進藤, 雄三
Citation	人文研究. 66 卷, p.211-222.
Issue Date	2015-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	高坂史朗教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

死の社会学的研究に向けて

進 藤 雄 三

「死の社会学」という領域は、社会学において必ずしも明確に学術的に認知されてきたとはいいがたい。本報告では、多様な学問領域および個別分野において分散的になされてきた死・死別をめぐる研究を対象とし、それらを包括的に概観しうる共通の地平を社会学的観点から理論的に切り開くことを目的とする。具体的には、1)「死の社会学」に関する蓄積の厚いアメリカにおいて、標準性を備えると判断される複数の代表的なテキストを素材に、その構成を検討し、2)同時に日本における死の社会学に関する先行研究を整理しつつ、両者を接合可能とする理論的・分析枠組みを暫定的に構築する、という2点を本報告の達成目標とする。

はじめに

本研究は、「死の社会学」と呼ぶべき新たな領域に関するパイロット・スタディーをめざすものである。この主題は、社会学の主要な研究領域として認められてきたとはいいがたく、散発的に個別分野（医療、生命倫理、戦争、自死、心性史など）における断片的な研究がなされてきたにすぎない。本研究の目的は、このように断片化された領域・分野を横断する共通の地平を、理論的・経験的に切り開くことにある。

「死の社会学」という主題は、まず分析対象の学術的意義に関して説明を要請する主題である。その意味において日本社会学会の学会誌である『社会学評論』(vo. 63-2, 2012)において、おそらく初めて「死の社会学」という「テーマ」がテーマ別研究動向 (pp. 302-311)として取り上げられたことの意義は小さくはない。そこにおいて、主に三つの著作（澤井敦『死と死別の社会学』青弓社、2005；立岩真也『良い死』筑摩書房、2008；中筋由起子『死の文化の比較社会学』梓出版社、2006）が取り上げられている。執筆者である株本は、澤井の著書を「死と死別を近・現代社会の全体的動向との関係からみるために、社会理論的な接近を試みた」理論分析（株本 2012, p. 304）、立岩の著書は「『死の自己決定』について社会学的な考察が展開される」言説分析（同、p. 306）、中筋の著作は「葬送儀礼と墓地祭祀」からみる「死の文化の実証的かつ比較社会学的」実証分析（同、p. 308）、と要約している。

これらが「死の社会学」に分類できる比較的近年のすぐれた研究であることは否定しない。だが、この三つの著作によって「死の社会学」が象徴的に代表されうるかどうかは全く別の問

題である。なぜこの三つのなのか、その根拠が与えられないかぎり、個人的な散発的研究として、あるいは社会学史（澤井）、尊厳死・生命倫理（立岩）、文化・社会人類学的比較文化研究（中筋）といった旧来のカテゴリーのなかに分類され、「死の社会学」という統一的主题に包摂される新しい領域は生み出されえないだろう。

1 欧米における先行研究 I: 1980 年代のテキスト

これに対して、少なくとも欧米を中心にとらえて見た場合、この研究系列は比較的特定できる様相を示している。一つの系列は、イギリス人社会学者のゴラーによる「死のポルノグラフィ」(1955) 論文を嚆矢に、現代社会における「死の拒絶」「タブー視された死」という主題を 70 年代、80 年代を通して世界的に顕在化させた心性史家アリエスによる著作（『死と歴史』みすず書房、1983 [1975]；『死を前にした人間』みすず書房、1990 [1977]）、そしてエリアスにいたる系譜である（『死にゆくものの孤独』法政大学出版、2010 [1982]）。もう一つの系列としては、アメリカにおける葬儀産業研究、そして上述の「無視された研究領域」としての「死」を、60 年代に医療という場において提示した社会学的著作（グレイザー＝ストラウス 1988 [1965]；サドナウ 1992 [1967]）などを先駆的なものとして挙げる事ができる。このアメリカにおける死の研究、とりわけ医療領域における研究の隆盛は、キューブラー＝ロスの著作（キューブラー＝ロス 2001 [1969]）のインパクトに加え、脳死－臓器移植などの「先端医療革命」のインパクト、それに応じた生命倫理的議論、「デス・エデュケーション」の制度化によるところが大きい¹⁾。1970 年代以降では、その後の安楽死・尊厳死運動の源流となるアメリカにおけるカレン裁判の社会的インパクトが、上記二つの系列を結び合わせる仕方で「死」をめぐる研究に息吹を与えてきたといっていだろう。

こうした背景をもとに、1980 年代にはアメリカで「死の社会学」に関する系統的な視点の提示が少なくとも二つのテキスト（K. Charmatz, 1980 *The Social Reality of Death: Death in Contemporary America*, Addison Wesley; M. C. Kearl, 1989 *Endings: A Sociology of Death and Dying*, Oxford University Press）に代表される形で提起されている。その後、管見のかぎりでは、これを質的に凌駕すると思われる枠組みは提示されていないと思われる。以下、この二つの著作の構成を概観する。

1) *The Social Reality of Death: Death in Contemporary America* (335pp)

- Chap. 1 The Reality of Death
- Chap. 2 Conceptual Approaches to the Study of Death
- Chap. 3 Death Conceptions and Concerns in Everyday Life
- Chap. 4 Ethical Issues and Euthanasia

- Chap. 5 The Social Process of Dying
- Chap. 6 Death Work: Processing the Dying and the Dead
- Chap. 7 The Routinization of Extraordinary Death
- Chap. 8 The Social Context of Suicide
- Chap. 9 The Social Psychology of Grief and Mourning
- Chap. 10 The Future of Death

第1章は序論、第2章は社会学、哲学、精神分析にわたる6つの概念枠組みを提示し、第3章ではそれが一般社会の人々の死の概念とどのように関わっているのかが示されている。3章までが全体の枠組の提示部分といえる。第4章から9章にいたる部分が、本書の具体的な内容部分を構成しており、安楽死（第4章）、死の社会的過程（第5章）、死を扱う仕事（第6章）、非日常的死の日常化（第7章）、自殺（第8章）、喪と悲嘆（第9章）という配列になっている。

チャーマッツの論文の最大の特色は、第2章で挙げた死に対する6つのアプローチにおいて、自らの立場を象徴的相互作用（symbolic interaction）においていることに見出される。このことは、死の社会的過程を時系列に従って提示している第5章、医療職、仕事での死、葬儀産業職を扱う第6章、殺人、死刑、戦争死を「日常的」出来事として扱った第7章、自殺の社会的側面を分析している第8章、喪と悲嘆の過程を扱っている第9章にいたるまで、対象の選択およびその分析視点に明確に示されている。しかし同時に、この著作は1980年にアメリカにおいて出版されたという時代および社会的刻印を帯びている。チャーマッツは第1章の「なぜ今死なのか」という節のなかで、死が現代社会に新たな次元を加えていることをその理由として掲げ、1) 核によるホロコーストが現代の不確実性を示していること、2) 科学的進歩への懐疑が生まれ、資源の有限性へ自覚が生まれていること、3) 死における二つの動向—a. 急性伝染病から慢性病への疾病構造の転換、b. 死の処遇における「病院化」—が見られること、4) 死をめぐる社会運動の展開が見られることを、を指摘している（Charmatz 1980 pp. 7-12）。第5章に独立した章として「安楽死」をめぐる問題が取り上げられている点に、その痕跡が顕著である。

2) *Endings: A Sociology of Death and Dying* (521pp)

- Chap. 1 Introduction: Death's Revelations of Life
- Chap. 2 What Death Means: Death in Cross-cultural and Historical Perspective
- Chap. 3 Death's Impacts on Society
- Chap. 4 How We Die: The Social Stratification of Death
- Chap. 5 Death and Religion
- Chap. 6 Secular Perspectives on Death

Chap. 7 Death and Work

Chap. 8 The Politics of Death

Chap. 9 Death and the Military Experience

Chap. 10 Death in Popular Culture

Chap. 11 Death and the Medical System

Chap. 12 Death and the Individual: The Social Psychology of Dying and Surviving

Chap. 13 Conclusion

本書は、序論（第1章）、死をめぐる文化的・社会的・ヒエラルキーといったマクロな次元に関する概観を行っている部分（第2章・3章・4章）、さらに「生きることの理由、死すべきことの説明、死を乗り越える個人的な機会を与えることで、死というアノミックな恐怖から人々を保護する社会的諸制度」（Kearl 1989 p. 11）を個別に扱っている部分（第5章～11章）、個人の主観的体験を扱う章（第12章）という構成をとっている。

カールのこの著作は、非常に包括的であり、比較文化論および歴史的概観（第2章）、死の社会的インパクト（第3章）、「良い死」と「悪い死」という分類軸を用いての「死の社会的階層化」（第4章）という3章分の導入部分に、その志向性が顕著に示されている。同時に、「死というアノミックな恐怖から人々を保護する社会的諸制度」として、宗教（5章）、世俗的視点（6章）、仕事・職業（7章）、政治（8章）、軍事（9章）、大衆文化（10章）、医療（11章）を挙げるという構成は、それ自体が社会制度の学としての社会学的視点をオーソドクスに示している。そのなかで、類書と対比してカールの著作の特色を示しているのは、死の社会的インパクト、社会的意義を政治・軍事という制度と関連づけて独立した二つの章として設定した点である。

チャーマッツの著作がどちらかといえば、「社会学」と哲学・歴史学・精神分析との差異化を念頭に、「象徴的相互作用論」という社会学内部の特定のアプローチに特化したものであり、相対的にミクロな相互作用状況を主眼としていたとすれば、カールの著作では「差異化」戦略は後景化しており、ミクロな相互作用というよりメゾからマクロにいたる「制度」的枠組みが中心となっている。

しかし同時に、両者には比重の差こそあれ共通した事象への言及がある。一つは「先端医療革命」以後の死への関心の生起、疾病構造・死因における変化、医療技術のもたらす倫理的問題、そして他の一つは20世紀後半期における「死の拒絶」文化という認識である。また、カールが独立とした章とした「医療」（11章）「軍事」（9章）「仕事」（7章）は、チャーマッツにおいてそれぞれ第5章・6章、第7章、第6章で個別に扱われており、「主観的体験」（12章）は第9章で「喪と悲嘆」として分析されている。以上を踏まえて両者の分析対象の対比からすれば、チャーマッツが「安楽死」問題（4章）と「自殺」（8章）を独立させている点、カールが宗教（5章）を独立して取り上げ、それとの対比において「世俗的視点」（6章）を対象化し、

大衆文化（10章）をさらに独立させている点に項目上の差異があるといえる。

2 欧米における先行研究Ⅱ：1990年代以降のテキスト

「死の社会学」というテーマに関して、1990年代以降の動向を概観することには困難がつきまとう。一つには、1950年代から80年代にいたる期間に見られた基本的動向—疾病構造の転換、高齢化という人口学的転換、医療の高度化とそれに伴う生命倫理的課題の出現、尊厳死あるいは「死の設計」をめぐる運動、「死の拒絶」という主題-が基本的に引き継がれながらも、冷戦構造の終結、およびIT革命（情報革命）を組み入れるかたちで「グローバル化」が進展し、同時に「認識」の側面においてもポストモダンと総称される批判的言説に呼応する形での理論化が社会科学領域においても展開されるにいたり、共通の認識地平の可能性への懐疑が深まったという点が指摘できる²⁾。

その中で、以下ではグローバリゼーション以降の社会変動がその効果を確実に浸透させてきた21世紀に入って出版された二つの著作、G. Howarth, 2007 *Death & Dying: A Sociological Introduction*, Polity Press と R. Mcmanus, 2013 *Death in a Global Age*, Palgrave Macmillan を取り上げる。

1) *Death & Dying: A Sociological Introduction* (301pp)

Part I Social Characteristics and Attitudes to Death

- 1 Death, Denial and Diversity
- 2 When and How People Die
- 3 Life and Death in 'Risk Society'
- 4 Death, Religion and Spirituality
- 5 Death and the Media

Part II Social Structures and Individual Experiences of Dying

- 6 Dying: Institutionalization and Medicalization
- 7 The Good Death
- 8 The Social Organization of Sudden Death
- 9 The Dying and the Dead Body

Part III Post-Death Rituals of Remembrance and Survival Beliefs

- 10 Grief and Loss
- 11 Relationships Between the Living and the Dead
- 12 Mourtuary Rituals

Conclusion

本書は、死の主題に関する基礎的知見を提示した5章構成からなる第一部（「社会的特性と死への態度」）、「構造とエージェンシー」という枠組みを基礎として設計され4章から構成される第二部（「社会構造と死にゆくことの個人的体験」）、現代西洋社会における死の諸相を扱った3章構成の第三部（「記憶という死後の儀礼と生存者の信念」）、という三部構成をとっている。

第1部、第1章は、歴史的概観および「死の拒絶」命題の検討、第2章は諸社会における死の処遇の概観、第3章は「リスク社会」における死の問題、第4章と第5章はこれまで「大衆文化」の領域として扱われてきた問題を扱っている。次に第二部は、第6章で構造的側面として病院化および医療化という動向を取り上げ、第7章で「良い死」の範例としてホスピス運動を対象とし、第8章では対照的に「悪い死」としての突然死あるいは死因分類上「非自然死」unnatural death とされる死の社会的処遇を分析し、第9章では死体の問題を「身体化」embodiment 概念と関係付けて論じている。第三部では、第10章で悲嘆と喪失の先行研究の概観とそれに対する代替案が提示され、第11章では「記憶」という観点から死後儀礼の現状が分析され、第12章では埋葬儀礼を対象に葬儀産業の役割、自然死運動が論じられている。

副題に「入門」(Introduction) と名うってはいるが、この著作は以下の三点において一貫した理論的志向性に貫かれていると言うことができる。一つは、分析の枠組み・視点という点、第二は死の社会学的研究において蓄積され、引き継がれてきた基本的な見解(命題)の再検討、新たな見解の提示という経験的-理論的主張が含まれている点、第三は80年代以降の理論的概念を明示的に取り上げ、死の社会学の主題と明確に関係づけている点である。

まず第一の点に関しては、死という主題に対して、医学・生物学、神学・哲学、心理学、人類学・歴史学との差異化のなかで、いかに社会学の領域を担保するのかという問いに対し、「構造とエージェンシー」という枠組みの観点、とりわけ両者の相互関係性を強調するブルデュー、ギデンズ、ハバーマスの3名の理論枠組みを参照することで答えている(Howarth 2007 pp. 2-6)。このスタンスは、チャーマッツの採用したものと同質のものであり、母体としての社会学のなかに「死の社会学」を明示的に位置づける役割を果たしていると言える。

次に第二点目に関しては、具体的には「死の拒絶」という80年代までの不動の前提、およびこの前提と密接不可分の形で前提とされてきた「死の医療化」という主題が、それぞれ第1章および第6章で再検討されている。この論点は、90年代以前と以後の「死の社会学」の差異を最も鮮明に示すものにとらえることができる³⁾。

第三の論点に関しては、90年代以降の社会学・社会科学に広範な影響を及ぼしたベックの「リスク社会」論を組み込んだ第3章、ターナーの「身体化」embodiment 概念(Turner 1922)を死体論に接合させ、アイデンティティ論へと展開した第9章、さらに「記憶の社会学」の成果を明示的に取り入れた第11章、の3つの章に典型的に示されている。

本書の理論志向性は上記にとどまらない。たとえば、「メディアが宗教に取って代わった」という命題の検討（第4章）、「悲嘆」を正常－異常の枠組みではなく、生者と死者の連続体の観点から捉えようとした第10章、さらにはこの分析の延長線上に、「近代」という時代を生－死を分離させた時代として定位した結論部分の終章に、その理論性は色濃く反映されている。

3) *Death in a Global Age* (257pp.)

Introduction: Death is Integral to Life

- 1 Perspectives and Theories on Death and Dying: New Horizon
- 2 The Social Organization of Death and Dying: A New Paradigm Emerges
- 3 Patterns in Life and Death: Demographic Trends and Life Expectancies
- 4 The Death Industries: Bespoke My Death
- 5 Funeral Rites: Give Me a Decent Send-Off
- 6 Grief: Solace in a Global Age
- 7 Death: Global Imaginaries
- 8 Religion: The De-secularization of Life and Death
- 9 Representations of Mortality: Watching Real Death is Good?
- 10 Conclusion: Death in a Global Age

本書は、扱っている対象（章構成）においては、ある意味オーソドックスな死の社会学研究の慣例にしたがっている。理論編にあたる第1章を冒頭に、第2章では近代-現代医学を新しいパラダイムとして提示した上で、生と死の人口統計の比較（第3章）、「死の産業」として医師と葬儀ディレクター（第4章）、葬送儀礼（第5章）、悲嘆（第6章）、大量死（第7章）、宗教（第8章）、表象（第9章）を個別に扱っている。大量死を独立した章としている点が、章構成上の一つの特徴とはいえるが、全体として扱う対象は標準的と言っていい。

この著作をあえて取り上げた最大の理由は、本書が「グローバリゼーション」以降の時代における死の社会学、という問題設定を明示的に掲げた恐らくは最初の著作だからである。医療の高度化以降に日常化した臓器移植、それがグローバル化において移植医療ツーリズムとして顕在化してゆく現状（第2章）、SARS・H1N1といったグローバル・パンデミック（第3章）、社会秩序の再構築という「儀礼」、さらに「悲嘆」という主題をサイバー空間において検証しようとする試み（第6章）、ポスト世俗における宗教の問題を原理主義と関連づける論述（第8章）、フィクションとリアリティという軸を用いて死の表象を包括的にとらえようとした分析（第10章）—これらは、グローバリゼーションという用語でわれわれが意識する、90年代以降のIT空間・サイバースペースの飛躍的展開、そして世界規模で生起している死をめぐる理解にとって、決定的な意義を持つと思われる事象を包括的に論じている。

理論を扱った第1章での議論が、個別の諸章といかなる関係に立つのかの関係性が必ずしも明確ではなく、個々の分野間の関連性も論理的整合性という観点からは疑義も残る。しかし、個別の主題について「グローバル」という視点を系統的に組み入れようとする意図は明白であり、そこで提示されている事象の意義は十分認められる。

テキストとしての標準性・典型性、包括性、理論-経験的素材のバランスという点で、ホワースの書籍は範例性を持っている。マクナマスの書籍は、これらの点において必ずしも高い評価を与えることに躊躇させるものがあるが、グローバリゼーション以降の死の社会学が何を取り上げるべきかという、主題提示において独創的な貢献を行ったと言えるだろう。

80年代までのテキストと対比した場合、90年代以降のテキストの差異は、大別して二つあると言えるだろう。一つは「死の拒絶」という主題に対する懐疑的・批判的なとらえ方が明白に認められるという点、そして他の一つは従来「大衆文化」の項目でとりあげられてきた「メディア」の領域において、サイバー空間の意義を強調する側面が強化されているという点である。

3 日本における「死の社会学」研究に向けて

日本において「死の社会学」というタイトルを書籍の題名に関した著作は、管見のかぎり2001年に刊行された、副田義也編による『死の社会学』（岩波書店）（副田 2001）ただ1冊である。訳書のタイトルとしてもゴーラーの『死と悲しみの社会学』（ヨルダン社）（ゴーラー 1989）、単著としてはゴーラーの著作の訳者でもある宇都宮による『生と死の宗教社会学』（宇都宮 1989）、本報告の冒頭で挙げた澤井敦による『死と死別の社会学』（青弓社）（澤井 2005）、中筋由起子による『死の文化の比較社会学』（粹出版社）（中筋 2006）、さらに日本法社会学会編の『死そして生の法社会学』（日本法社会学会 2005）「死」と「社会学」を含む数少ない著作の代表例にとどまっている。少なくとも1節・2節で取り上げた「死の社会学」のテキスト内容と対比するならば、日本の社会学界においてそのカウンターパートは存在してこなかったといっても過言ではない。だからこそ、2012年の学会機関誌において、「テーマ別研究動向」として「死の社会学」が取り上げられたことは、それが日本の社会学において一つの独立したテーマ領域であることを公に認められたことを意味するものとして、重要な意義を持つ。

こうした点を前提としつつ、以下では1) 日本において注目に値する先行研究、および言及すべき研究領域について簡略な概括を試み、2) 1・2節で概観したテキスト構成と適合可能な枠組みの提示を試みる。

1) 日本における先行研究および問題関心：覚え書き

1. 作田によって先鞭をつけられた、戦犯受刑者の遺書の分析に基づいた死の受容の類型分析（作田 1967）、同様に戦時下における死生観を論じた森岡による 2 著『決死の世代と遺書』（森岡 1993, 1995）、さらに作田の分析を検証分析した副田の分析（副田 1997）—この 3 名の社会学者による研究系列は、その数は多いとはいえないが、日本文化論に接合しうる内容を伴った重要な意義を持っている。また、「自死」という観点から、戦時における日本の特攻隊員の遺書の分析を行ったモーリス・パンゲによる『自死の日本史』（パンゲ 1986 [1984]）、また人類学者の『日本人の死のかたち』（波平 2004）を、この主題と密接に関連した日本研究として挙げておく必要がある。

2. 葬儀・葬送関係に関しては社会学者によるものはほとんどといっていいほどなく、わずかに既述した中筋による『死の文化の比較社会学』（中筋 2006）、「墓」を対象とした『お墓の社会学』（楨村 2013）を挙げるにすぎない。関連した研究として、人類学者による『死の人類学』（内堀・山下 1986）、民俗学系の代表的な文献『葬送文化論』（葬送文化研究会 1993）、『火葬の文化』（鯖田 1990）、『近代火葬の民俗学』（林 2010）、さらに歴史学者による『墓と葬送の社会史』（森 1993）などが挙げられる。また、現代日本を対象とした Suzuki による 2 つの書籍（Suzuki, 2000; Suzuki, 2013）もこの系列に属す業績と言える。

3. これまでの日本の死の社会学研究において主題とされてこなかったものの一つに、戦争および大量死の問題がある。しかし、近代の歴史は戦争の歴史でもあったということとどまらず、ホロコースト、ジェノサイドという人種・民族が関係する大きな問題がすでに主題化している。それだけでなく、90 年代以降のグローバリゼーションのなかで、原理主義、テロリズム、部族対立に起因する問題がグローバルに展開されている。1 の研究系列もこうした主題のもとに包摂されうる。

4. この問題と密接に関係する主ものとして、現代日本社会において逃すことのできない主題が 1995 年の阪神大震災と 2011 年の東日本大震災である。前者に関しては『喪失と生存の社会学』（樽川 2007）、後者に関しては『震災死』（吉田 2012）が実相を伝えている。震災死あるいは震災関連死という用語とともに、この二つの震災という出来事を死の社会学というテーマにどのように組み入れて行くが問われている。3.4 は同時に「記憶の社会学」⁴⁾の業績と接合される必要がある。

5. もう一つ日本を対象とした場合に取り上げておくべきトピックとして、「仕事」との関係における「過労死」、および検死・葬儀に携わる職業の問題が挙げられる。また、良い死—悪い死との対比において、「水子」のトピックが中絶の問題とも重なる重要な言及すべき事象となる。

2) 暫定的枠組み

1) の覚え書きと、第 1 節・2 節で概観した 4 つのテキスト分析から、日本社会における

「死の社会学」の範囲に関して、暫定的に以下の主題構成を提示する。

- 1 死をめぐる文化と歴史（比較文化、歴史概観、「死の拒絶」主題へのコメント）
- 2 死の社会的インパクト（機能論的説明、構造とエージェンシー、個人化）
- 3 生と死の人口学的パターン（国際比較、日本の近現代への変化）
- 4 死に行くこと：制度化と医療化（mortality の医療化、病院化）
- 5 葬送の変容（葬送の産業化、自然葬、個人化）
- 6 死の規範：良い死と悪い死（自然死-非自然死、自殺・他殺、事故死、尊厳死・安楽死）
- 7 死と仕事（階層性、過労死、死を扱う仕事）
- 8 死別と悲嘆（規範との関係、支援における規範、メディア）
- 9 死のポリティクス（階層・ジェンダーと死、死刑、記憶の社会学 [震災死]
- 10 戦争と死（戦死、大量死 [震災死]
- 11 エイジングと死（人口学、水子、中絶、自然死）

（下線した用語は、日本に特有の事象）

1～3までは導入部というべき主題であり、4～11までは死の社会学において標準的とされてきたトピックを配列している。欧米の類書に比して特徴的な諸点は、個別的に言えば、1. 「良い死－悪い死」の2分法の文脈で扱われてこなかった、尊厳死・安楽死の問題を明示的にこの文脈に位置づけている点（第6章）、2. 死別と悲嘆という標準的なトピックに対して、生存者・遺族のケアに携わる人々の背後にある「規範」の問題を組み込み（第8章）、サイバー空間における悲嘆の様態を導入している点（第8章）、3. 戦争・大量死のテーマを日本においておそらく初めて独立させ（第10章）、震災死というテーマを組み入れている点、4. 「過労死」（第7章）、「水子」（第11章）という日本に特有の事象を組み入れている点、である。しかし、欧米あるいは東アジアとの対比という点で一般的に言えば、5. 1) 第1章および、第6章の自殺・安楽死、さらに第8章、10章、11章などを通じて、日本の死の文化・価値意識・意味付けの問題を個別の分野に応用させ、2) 第3章、第11章などを通して、日本における超高齢化の進展が死にもたらす影響を広範に考察する、という点において「死」を通した日本社会論ともなることを企図している。

【注】

- 1) この段落で記した1950年代から80年代にかけての動向を、コンパクトに概観した著作としては、石川による労作がある（石川1990）。また、医療における動向を中心とした概観としては進藤（進藤1990）を参照。
- 2) 「ポストモダン」という言葉で何が意味されるのかに関して、必ずしも合意が成立しているわけではないし、1990年代後半以降、社会学内部では「再帰性」（reflexivity）という用語がむしろ選好されるにいたっている。90年代前半期までのポストモダン言説に関しては、進藤（進藤2006）を参照。

- 3) 「死のポルノグラフィ」以降の「死の拒絶」命題に関して、最初の疑問を呈した著作がウォルターによって1994年に刊行されている(Walter 1994)。この著作の刊行以降、「死の社会学」について言及しようとするかぎり、常にこの問題提起に対してどのようなスタンスを取るかが問われるにいたり、ホワースも明示的にこの問題提起を取り上げていることになる。
- 4) 「記憶の社会学」の概観に関しては、浜の論文(浜 2007)、また訳書としては『社会はいかに記憶するか』(コナトン 2011)などがある。

【引用・参考文献】

- Ariès, P., 1975 *Essais sur l'histoire de la mort en Occident*, Seuil=1983 伊藤晃・成瀬駒男訳『死と歴史：西欧中世から現代へ』みすず書房
1977 *L'Homme devant la mort*, Seuil=1981 *The Hour of our death*, Knopf=1990 成瀬駒男訳『死を前にした人間』みすず書房
- Bauman Z. 2006 *Liquid Fear*, Polity Press=2012 澤井 敦訳『液状不安』青弓社
- Charmatz, K 1980 *The Social Reality of Death: Death in Contemporary America*, Addison Wesley
- Connerton, P. 1989 *How Societies Remember*, Cambridge University Press=2011 芦荻美紀子訳『社会はいかに記憶するか』新曜社
- Conrad, P. 2013 “Medicalization: Changing Contours, Characteristics, and Contexts,” in W. C. Cockerham (ed.), *Medical Sociology on the Move*, Springer
- Ellias, N., 1985, 2001 *Loneliness of the dying and Humana Conditio*, Bloomsbury Academic=1990 中居実訳『死にゆく者の孤独』法政大学出版
- Glazer, B. G. & A. L. Strauss, G. 1965 *Awareness of Dying*, Aldine Pub.Co. =1988 木下康仁訳『「死の Awareness 理論」と看護』医学書院
- Gorer, G., 1965 *Death, Grief, and Mourning in Contemporary Britain*, Cresset Press=1986 宇都宮輝夫訳『死と悲しみの社会学』ヨルダン社
- 浜 日出夫 2007 「記憶の社会学・序説」『哲学』第117号 pp. 1-11
- 林 英一 2010 『近代火葬の民族学』法蔵館
- Howath, G., 2007 *Death and Dying: A Sociological Introduction*, Polity Press
- Howath, G., & P. C. Jupp eds., 1996 *Contemporary Issues in the Sociology of Death, Dying and Disposal*, Macmillan
- 石川弘義『死の社会心理』金子書房、1990
- Kearl, M. C. 1989 *Endings: A Sociology of Death and Dying*, Oxford University Press
- Kellhear, A., 2007 *A Social History of Dying*, Cambridge University Press.
- Kubler-Ross, E. 1969 *On Death and Dying*=1971 川口正吉訳『死ぬ瞬間』読売新聞社/2001 鈴木晶訳 中公文庫
- 株本千鶴 2012 「テーマ別研究動向(死の社会学)」『社会学評論』第63巻第2号, pp. 302-311
- 槇村久子 2013 『お墓の社会学』晃洋書房
- McManus, R., 2013 *Death in a Global Age*, Palgrave Macmillan
- 森 謙二 1993 『墓と葬送の社会史』講談社(2014年に吉川弘文館から再発行)
- 森岡清美 1993 『決死の世代と遺書』(補訂版) 吉川弘文館
- 森岡清美 1995 『若き特攻隊員と太平洋戦争』吉川弘文館
- 中筋由起子 2006 『死の文化の比較社会学』梓出版社
- 波平恵美子 2004 『日本人の死のかたち』朝日新聞社
- 日本法社会学会編 2005 『死そして生の法社会学』有斐閣
- Pingue, M. 1984 *La mort volontaire au Japon*, Gallimard=1986 竹内信夫訳『自死の日本史』筑摩書房
- 鯖田豊之 1990 『火葬の文化』新潮選書
- 作田啓一 1967 「死との和解」『恥の文化再考』筑摩書房
- 作田啓一 1972 『価値の社会学』岩波書店

- 澤井 敦 2005 『死と死別の社会学』青弓社
Seale, C., 1998 *Constructing Death: The Sociology of dying and Bereavement*, Cambridge University Press
進藤雄三 1990 『医療の社会学』世界思想社
進藤雄三 2006 『近代性論再考』世界思想社
Sudnow, D. 1967 *Passing On: The Social Organization of Dying*, Prentice-Hall=1992 岩田啓靖・志村哲郎・山田富秋訳『病院でつくられる死』せりか書房
Suzuki, H. 2001 *The Price of Death: The Funeral Industry in Contemporary Japan*, Stanford University Press
Suzuki, H., ed. 2013 *Death and Dying in Contemporary Japan*, Routledge
副田義也 1997 「死者とのつながり」『社会学ジャーナル』第22号（副田2001に所収）
副田義也編 2001 『死の社会学』岩波書店
葬送文化研究会編 1993 『葬送文化論』古今書院
立岩真也 2008 『良い死』筑摩書房
樽川典子編 2007 『喪失と生存の社会学』有信堂高文社
Turner, B. S., 1992 *Regulating Bodies: essays in medical sociology*, Routledge
上野千鶴子 1994 『近代家族の成立と終焉』岩波書店
内堀基光・山下晋司 1986 『死の人類学』弘文堂
宇都宮輝夫 1989 『生と死の宗教社会学』ヨルダン社
Vermon, G. M., 1970 *Sociology of Death*, Ronald Press
Walter, T. 1994 *The Revival of Death*, Routledge
吉田典史 2012 『震災死』ダイヤモンド社

【2014年9月9日受付, 10月28日受理】

Towards a Sociology of Death in Japan

SHINDO Yuzo

Theme of 'Sociology of Death' has not been academically well acknowledged in Japanese settings. Although the studies of death and dying ranges wide, this paper tries to bring change to the situation by presenting the theoretical framework of Sociology of Death hoping to provide the common intellectual horizon. To be concrete, this paper tries to 1) critically examine the representative Texts of the Sociology of Death published mainly in America, and then 2) present a tentative Textual constitutions through overviewing the Japanese literatures and articulating them to the western frame.